

博士課程教育リーディングプログラム 「グローバル・リソース・マネジメント」の 発足に当たって

プログラム・コーディネーター
大学グローバル・スタディーズ研究科長

ないとうまさのり
内藤正典

文部科学省の公募による本年度の博士課程教育リーディングプログラム、複合領域型（多文化共生社会）において、本学の「グローバル・リソース・マネジメント」が採択された。申請からヒアリングまで、学長のリーダーシップのもと、本学の多くの教職員が携わったプログラムであり、この場を借りてご協力をいただいた皆様にお礼申し上げます。

文部科学省によれば、リーディングプログラムとは、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進する事業である（平成24年度「博士課程リーディングプログラム」公募要領）。

本学の「グローバル・リソース・マネジメント」プログラムは、地球規模の課題群（グローバル・イシューズ）を主専攻とする学生がインフラ科学、資源・エネルギー科学の理工学分野

を副専攻とし、また、理工学系を主専攻とする学生が地球規模の課題群を副専攻とする文理融合型の博士課程一貫教育プログラムである。基幹研究科はグローバル・スタディーズ研究科と理工学研究科だが、連携研究科の専攻に所属する学生も一定の条件を満たせば履修が可能である。ここでは、本プログラムの趣旨を述べておきたい。

本プログラムは、人間生活の基盤となるインフラ科学、資源・エネルギー科学と、地球規模の課題群を扱うグローバル・スタディーズの融合を基に「グローバル・リソース・マネジメント」という文理融合の学際領域を設定し、博士前期・後期課程の一貫プログラムを構築する。強靱な精神と高度な倫理観をもつて、今日、最も困難な状況にある国から、新興国までをパートナーとして活躍していくグローバル・リーダーの養成を目指すものである。本プログラムが養成する人材像とは、①災害、紛争、貧困など、生存の危機に瀕する過酷な状況にある人々に寄り添い、共に学ぶことによって困難を打開する志を持ち、②そのために必要な人文・社会科学と自然科学の諸領域を統合知として

修得する学徒であり、③文理融合の知を基に、「公正」のなんたるかを意識しつつ、宗教間、民族間の共生を志向し、地球的課題としての困難の発生を抑止し、また発生した困難から復興と発展に取り組む。④同時に、困難から脱して、発展の途上にある新興国において発展の持続性と格差の縮小に取り組むことで、これらの諸国と戦略的パートナーシップを築いていく。今日、東アジア、東南アジア、中東、中央アジアは経済成長の過程にあり、G20諸国および、それに次ぐ成長を実現している諸国は数多い。博士学位を有する高度専門職業人のキャリアパスとして、これらの地域の新興国群をターゲットとするところに本プログラムの特色があるが、その先には、困難から発展への道筋を自ら経験することにより、その知見と経験を将来の日本の発展へとつなげるという目標をもつ。

現代世界の閉塞状況を突破するためには、人間生活の物質的基盤（インフラストラクチャー）、社会的基盤、精神的基盤の3領域を統合的に扱う新領域の創造が必要である。そのために、本学が長年にわたって高度な研究・教育実績を有する資源・エネルギーに関わる自然科学・理工学的知の体系と、多文化共生に関わる人文・社会科学の知の体系を統合した文理融合による博士課程教育プログラムを創造する。自然科学・理工学系からは、電力、エネルギー、情報、交通、水資源管理の領域がプログラムに参加する。人文・社会科学系からは国際的に研究をリードする多文化共生、神学、人間の安全保障、紛争抑止、平和構築、開発学、政策科学、社会福祉学等の領域がプログラムに参加する。中でも、イスラーム世界との共生をグローバルな

多文化共生実現の課題として重視する点が特色である。

国の施策としてのグローバル・リーダーの養成を目的にしながらも、いかなるリーダー像を描くかという点については本学独自の方向性を打ち出している。ここでいうリーダーとは、既存の成功者をモデルとするものではない。また、一国の支配者を養成しようというものでもない。第一に、今の日本の閉塞的状況を打開するには、すでに少子化の著しい日本に留まっているだけでは難しい。インドネシア、トルコ、中国など若年人口の層が厚い新興国において互いに切磋琢磨することで、彼らのエネルギーを肌で感じ、その中からいつかは日本の再生に貢献する人材を育てたい。それと同時に、今日の世界で、最も困難な状況に直面する国や地域に暮らす人々と共に困難を打開する知恵を育み、それを実現に向かわせていく人材を養成するところに、本プログラムの構想するグローバル・リーダーの姿がある。最困難国（地域）としては、本学で平和構築に取り組んできたアフガニスタンとパレスチナのガザ地区に焦点を当てていく。そのために、外務省、JICA、UNESCOを始め、グローバルな産学官連携を推進していきたい。

プログラム履修生となるには、グローバル・スタディーズ研究科、理工学研究科、そしてプログラム担当教員が所属する連携研究科・専攻に所属することが必要である。学位そのものは、学生が所属する研究科の履修規定に従って取得を目指すものであり、そのうえで文系の学生は理工系科目および文理共修科目から、理系の学生は文系科目および文理共修科目から、20単位以上を履修することが求められる。新興国や最困難国においては、

人文・社会科学のみ、あるいは理工学のための知識を持つ人材にできることは限られる。理工学の知識をもちつつマネジメントや社会貢献を考えていかなければ、グローバル展開を果たした企業であっても異文化との共生を実現するリーダー足り得ない。逆に、人文・社会科学について深い知見を有していても、現実の人間社会の基盤となるインフラストラクチャーや資源・エネルギーについての知見をもたなければ、人類社会の安定には寄与できない。リーディングプログラム「グローバル・リソース・マネジメント」とは、これらの領域に特化して文理融合の教育を実践し、履修生が将来において多文化共生社会の実現に向けて進んでいくためのバックアップをする博士課程一貫教育である。

履修生一人ひとりが、地球市民としての貢献を絶えず意識しながら5年間の大学院博士課程を過ごしてほしいと考えている。本プログラムでは、プログラムの履修生となった学生に、特別奨励金を給付する予定である。これは海外でのインターンシップやフィールドワークに出かける学生の経済的負担をできるだけ軽減することを目的とする。このプログラムは、狭義の研究者養成をめざすものではない。博士学位を持ち、持続可能な発展と他文化の共生に多様な分野で貢献する人材を育てていきたいと考えている。

※連携研究科・専攻

神学研究科神学専攻、文学研究科哲学専攻、社会学研究科社会福祉学専攻、社会学研究科産業関係学専攻、法学研究科公法学専攻、経済学研究科経済政策専攻（博士課程（後期））、経済学研究科理論経済学専攻（博士課程（前期））、経済学研究科応用経済学専攻（博士課程（前期））、商学研究科商学専攻、総合政策科学研究科総合政策課学専攻



同志社 クローズ・アップ

東瀬戸内と大坂城を巡る 知の世界遺産化プロジェクト

大学文化情報学部准教授 津村宏臣 つむらひろおみ

1. はじめに

現在、私達が目にする大坂城は、昭和年代に入り再建されたものだが、その石垣は、ほぼ徳川時代に構築された姿を残している。徳川大坂城の各大名への普請は、石垣のための採石・石材運搬・石の積み上げの各作業工程に分けて研究が進められている。このうち石材運搬については文献史料や後世の絵図が若干あるだけで実態が不明であり、関連する遺跡や遺構は全国的に確認できていない。

同志社大学文化遺産情報科学研究センター（以下、センター）は、当時の石材運搬の具体像を復元し、海を中心としたヒトと技術の交流の実態解明を目指して総合的な調査・研究を開始した。特に、徳川大坂城だけでなく豊臣大坂城や、昭和期の復興天守再建とその背景なども含んだ、大坂（阪）と東瀬戸内の文化生態を世界遺産化しようという意欲的な試みである。また、小豆島町、大坂城、同志社大学、NPO法人SOCRAH、民間サークルあきやきクラブなど、産官学民の連携を前提とした、

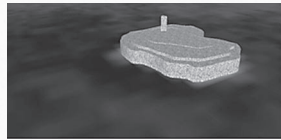
これまでにない組織連合体でのアプローチも、“地域知”を遺産化しようとする上では重要なファクターとなる。

2. 調査と結果

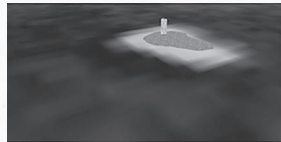
2012年度から、まず近世景観を残していると考えられる小豆島東海岸とその海中から調査を開始した。日本では例を見ない海中での詳細な遺構調査は、水中考古学の実践事例としても希有である。これまでも、センターでは様々な世界遺産調査に従事してきたが、“Oからのスタート”は初の試みであり、“真の遺産学（地域知の集積）”とは何かを実践から明らかにできる機会と位置づけている。また海に囲まれた日本という地域特性と水中考古学という方法を有機的に連携させることは、学術的拠点を形成する上でも意義のあるプロジェクトとなる。

（1）海岸部の地形測量

各種デジタル機器を用いて、石材運搬と深く関連する山↓海岸↓海の地形変化を細かく記録した。センターで開発したLRFとデーターロガーを用いた簡易測量技術（同志社大学…特許申



干潮時



満潮時

測量結果と
潮汐シミュレーションによる
係留施設の変化(CG)

の1年前の1619年から完成の1630年の潮汐を推算し、干満時における「かもめ石」の水没状況を評価する。潮汐シミュレーションは海上保安庁の『書誌第742号日本沿岸潮汐調和定数表』で実施し、推算港湾は小豆島坂手港基準点から得られたデータを用いた。

結果として、1619年における平均潮汐が100・26cmであり、1630年においては平均潮汐が99・84cmと著しい変化はみられず、石材を搬出していた期間は安定した潮汐がみられたことが窺える。水中調査時にダイブコンピュータ測定によって最大干満の時間に水深測定を行い、そのデータと合わせて過去の平均値を抽出すると、1619年満潮時平均314・12cm、1630年満潮時平均316・18cmとなり、現在の「かもめ石」石柱部の約320cmを超えることがなく、この部分が水面より常に上に出るように造設されていることが明らかとなった。このことも「かもめ石」が具体的な係留施設に関わる水中遺構であることの証左となる。

3. 今後の展開

本プロジェクトは、産官学民が連携して地域の知である文化生態を世界遺産化しようとする新しい試みであり、本調査はその長い運動の緒に就いたばかりの一端である。実際にノミネーションに手を挙げ、暫定リストに掲載され、晴れて世界遺産になるためには、現在の「世界遺産」の俗的通念を学術的に変革していく必要があるだろう。その意味で、本学が中心となって、その学術的拠点を形成していくことは、新しい人文社会現象に対する実践的人材育成という意味でも、人類史の知を学ぶという学術的側面においても、小さくない動きを作れるのではないかと考えている。



LRF簡易測量機による海岸の測量

場で粗加工して搬出する準備を行った可能性を見いだした。特に従来「丁場」とされてきた海岸部が、石切場ではなく、その加工場であった可能性を示せたことは、新しい発見である。

(2) 海中石材・関連遺構の分布調査

1978年度に国指定史跡のための保存管理計画策定を目的に、岩谷地区の残石分布調査が行われた。当時の調査によつて山間部・海岸部の石材は把握されたが、海中部分は未確認であった。今回センサーでは、海中を対象に、スキューバダイビングによる分布調査を実施した。水中に没した石材の分布と形状を測量し、おそらく日本初の水中遺構測量図を作成した。また、地域伝承で大坂城石垣石の積み出しに使われたとされる水中の

請中)やデイファレンシャルGPS測量、写真測量と3次元レーザー測量などを組み合わせた。対象となる、天狗岩磯丁場の微地形と、亀崎海岸の自然石・加工石材の分布状況の密度解析、および点在する各石材の円磨度の空間分布傾向から山間部の天狗岩丁場から切り出した大型の石材を、直下の海岸に半ば転落させるように搬出し、磯丁



ダイビングによる水中遺構の調査

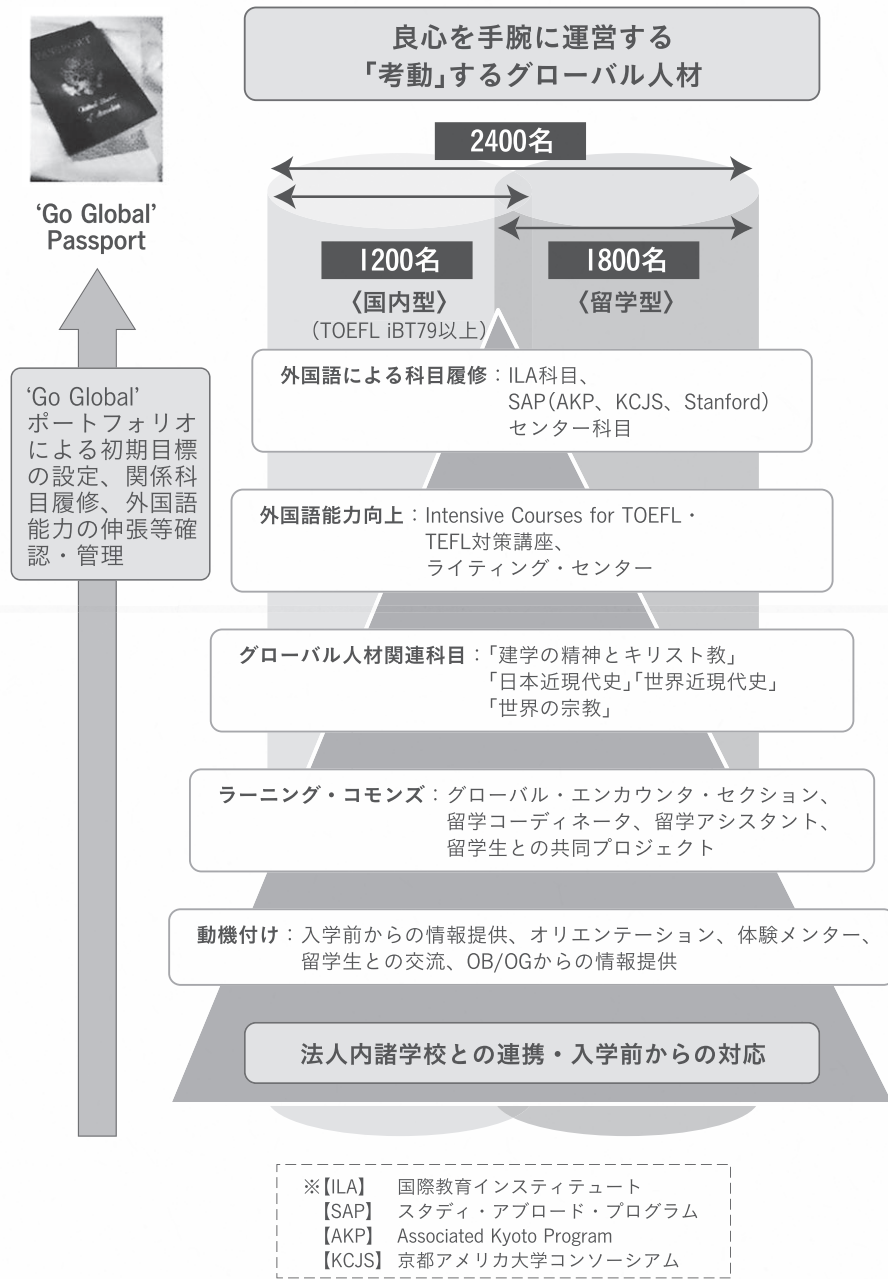
隔不明であった。これは徳川大坂城普請時の石材規格と合致している。矢穴は規模・形状から、近世初期とされているものであり、元和寛永年間の石材とみて間違いない。また、これらの石材の中に2段組みの遺構も確認された。現状では砂に覆われているため詳細は不明だが、今後、弾性波や音波による物理探査を水中で実施し、これらの概形の把握につとめる予定である。

(3) 潮汐シミュレーションによる検討

水中の石材分布と遺構をより機能的に理解するため「かもめ石」(海上に巨石を配置し、この上面に穴を開けて石柱を差し込み固めたビットのような遺構)の係留施設としての評価を、最新の潮汐シミュレーションによつて試みた。大坂城構築開始

「かもめ石」を実測し、目検による精査を行った。この「かもめ石」周辺の石材分布を検討すると、それより沖側20mはまったく石材が水中に存在しないのに対し、海岸から「かもめ石」の間には加工石材が集中して検出される。全体は不明だが石材の規模が長さ約200cm×縦50cm(埋没)×横50cm埋没、矢穴痕の規模が幅10cm×深さ8cm×間

同志社大学 グローバル人材育成推進事業の概要



【概要】

本構想は、4年間の在学期間中にわたる学生一人ひとりの全

本学の「良心と進取の気性に溢れる同志社グローバル人材養成のための実践的取組 (Doshisha Educational Program Filled with Conscience and enterprise for Global Competence)」が、文部科学省平成24年度「グローバル人材育成推進事業」タイプA（全学推進型）に採択されました。

「グローバル人材育成推進事業」は、若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国の絆の強化を基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材育成を図るべく、大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対して重点的に財政支援する文部科学省の事業です。現在、留学生の受入を主目的とする「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」(Global30事業)を推進しており、今回の採択事業は、Global30事業による留学生の受入促進と対をなし、留学を中心とした本学学生のグローバル化を促進するものです。これを機に、科目の新設、来年4月開設のラーニング・コモنزの活用等により、本学のグローバル化をさらに加速・充実させていきます。

文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1326068.htm

人格的な成長と陶冶、及びそれを支援する教員のグローバル教育力の伸長を促すことを目指しています。この実現のために有機的に連携した二つの教育プログラム、「留学型」と「国内型」を設定しています。「国内型」は国内にしながら、グローバル人材の育成を図る教育実践取組です。

取り組みの概要は、左記ページの通りで、積極的な情報提供により入学前段階から動機付けを行います。入学後は、ポートフォリオを活用して関係科目の履修や外国語能力の伸長度の把握を促し、留学コーディネーター等のアドバイスにより、学修を進めます。教育の取り組みとしては、実践的な外国語運用能力向上のための科目や、グローバル人材として不可欠な知識を教授する近現代史や宗教関係等の科目も新設します。G30事業により受け入れた多くの外国人留学生と、本事業によりグローバル人材としての能力を身に付けた本学学生が、学内で交流する機会を創出し、同志社らしいグローバル人材を養成していきます。

同志社
クローズ・アップ

文部科学省 平成24年度「グローバル人材育成推進事業」タイプA（全学推進型）に採択

国際連携推進機構

薬剤師とフィジカルアセスメント教育

医療を担う薬剤師の臨床活動を将来確実なものにするためには徹底した臨床教育が今後更に必要となる。薬剤師は、疾患や薬剤の知識を活かして目の前の患者さんの臨床に関わることになるため、薬学部6年間の初期から中期の4年間で、さらに臨床に踏み込んだ教育構成が必須である。そこで2012年度より、同志社女子大学薬学部医療薬学科薬物治療学教室は、薬物治療学実習にSimMan3Gという最新のシミュレーターを導入した。このことで薬学生の意識変化が期待され、卒業後の教育にも生かされれば現場から大学へのプレッシャーを強めてもらうことも期待され、いずれにしても、この機会を利用し、薬学部学生、卒業生の臨床への意識、患者さんへのアプローチを良いものにする一つの契機にしたい。もちろん高度のシミュレーターなので習熟すれば、実技面は身につくことはまちがいない。しかし、患者さんは機械ではない。将来は、医師が薬剤師と情報交換し、薬剤師も医師に処方提案する良き医療者になってもらいたい。薬剤師は治療を通して患者さんに症状改善や安心感を与え、医師の行動に薬物面で同じ目線で加わることが必要

である。そして治療内容の質や、患者さん満足度、安全性の向上実現を期待したい。新島襄は明治の初期にすでに、医療は、心の理解、苦しみの緩和、確かな専門知識の習得と言いつている。現在の医療は高度化したのが、まだ多くの問題が残っている。医療に貢献する薬剤師の活躍を期待したいがそれには持続的な更なる教育改革が課題といえる。

同志社女子大学薬物治療学実習

本学の、SimMan3G、およびPhysiko（従来より使用している機種、ただSimMan3Gが入ったことで両者を補完的に使用できるようになり有用性がさらに高まった）を用いた具体的な実習内容を紹介させていただく。実習の到達目標として、今年は「喘息の適切な治療薬を選択し、投与できる」に具体目標を定めて実習を行った。より良い医療を提供することが可能になるための手段として、SimMan3Gで模擬の病態を出現させ、症状、徴候からのアセスメント、フィジカルイグザミネーションとして血圧測定、胸部聴診等のトレーニングを行った。薬剤師の行うアセスメントの位置づけは、医師の診察とは異なり、日ごろの薬学的ケアの実践の向上に必要な行為というように考えてい

る。学生は、病状をアセスメントし、適切な薬物療法を検討する。基本のアセスメントとしては血圧、呼吸数、呼吸音、脈拍、酸素飽和度(SpO₂)、心電図などを測定できるようにした。呼吸器系では、チアノーゼの有無確認する、呼吸数、呼吸音の聴取など、また、循環器系では、脈を触知する、血圧を測定する、心音を聴取する、I音とII音を聴く、心雑音を聞きとる、消化器系では、腸蠕動音の判断などを行った。またカルテより、患者さんのバックグラウンド等の患者情報を読み取ることができる能力をこの実習で高めることも目標の一つである。

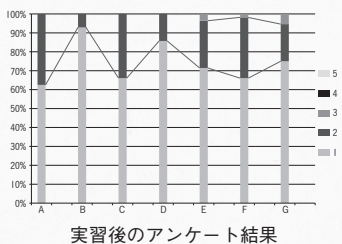
実習の特徴、可能性

本学では、2005年より学部新設に合わせてシミュレーターPhysikoおよびAEDのトレーニング装置を導入していた。2012年度より薬物治療実習において実施したSimMan3G次世代患者シミュレーターの特徴は、インストラクターモードとオートモードがあることだ。インストラクターモードでは、指導者が学生の反応を見て臨機に対応、指導でき、またオートモードでは各シナリオで患者のバイタルサインが自動的に薬剤投与に反応するリアルな体験が可能である。さらにシミュレーターを用いてチームトレーニングを実施することができるなど数々の利点をあげることができる。実習後はデブリーフィングを行うことが可能である（そのためのカメラが3台付いていて各人の行動をあとで評価できるようになっている）。ここでは学生が必要なことを実際行ったかをチェックできる。シミュレーションによる学習のプロセスにとって重要なことは、学習者に本物の経験をしてもらうことであるといわれている（文献1、2）。模擬すべきものとしては、患者の状態、利用できる情報、

治療/処置に対する反応、シミュレーション環境などが含まれる。その場を実際あり得る臨床状況に近づける必要がある、そのことにより学生に確実な知識がさらに深く記憶される効果が得られる。最後に、薬物治療学実習終了後のシミュレーター教育に関する4年次生のアンケート結果を示す。

シミュレーターでのトレーニングを用いた今後の薬物治療実習につき意見を聞かせてください。（番号に○をしてください）

A) フィジコ（2台ある方）を用いたトレーニングについて	1 大変良かった	2 まあ良かった	3 普通	4 やや悪い	5 悪い
B) シムマン SimMan 3G（ホワイトボード版）を用いたトレーニングについて	1 大変良かった	2 まあ良かった	3 普通	4 やや悪い	5 悪い
C) フィジコのようなシミュレーターを用いることで学ぶことにより意識がわくか	1 大いにわく	2 やや興味がわく	3 変わらない	4 やや興味が減る	5 興味が減る
D) シムマンのようなシミュレーターを用いることで学ぶことにより意識がわくか	1 大いにわく	2 やや興味がわく	3 変わらない	4 やや興味が減る	5 興味が減る
E) シミュレーター3台を用いた今回のような実習は、薬について学ぶ勉強意欲が増すか	1 大いに増した	2 やや増した	3 変わらない	4 やや減った	5 興味が減った
F) シミュレーター3台を用いた今回のような実習は、薬物治療に関する理解が深まるか	1 大いに深まった	2 やや深まった	3 変わらない	4 理解がやや減った	5 理解が減った
G) シミュレーター3台を用いた今回のような実習は、刺激になり今後の勉強に好影響を及ぼしたと思うか	1 非常に及ぼしたと思う	2 やや及ぼしたと思う	3 変わらない		



SimMan3Gを用いた実習は、全般に評価が高く、さらに運用に改良を加え実習を行う予定である。また以前よりのPhysikoもその長所を生かし、両者の活用度を高めたいと考えている。

文献

1. Gaba DM. The future vision of simulation in health care. Qual Saf Health Care. 2004 Oct;13 Suppl 1:12-10.
2. Isenberg SB, McGaghie WC, Petrusa ER, Lee Gordon D, Scalese RJ. Features and uses of high-fidelity medical simulations that lead to effective learning: a BEME systematic review. Med Teach. 2005 Jan;27(1):10-28.

ドレス再現のいきさつ

2012年は、「八重のドレスに始まり、八重のドレスに終わった」といっても過言ではないほど、いつも新島八重のドレスと共にあった1年でした。3月に女子大学広報課より、福島県に寄贈するための1着と女子大学所蔵用の1着、つまり同じ2着の八重の衣装を学生と共に再現製作できないか、との打診がありました。

それは2013年の大河ドラマ「八重の桜」の製作発表を受けて、同志社全体の協力的体制の下、女子大学の知的財産や学術を活用することで、東日本大震災の復興に役立てたいとの意向からでした。多少不安もありましたが、「これまでの経験を生かし、少しでも東日本復興支援のお役にたてるのであれば」との思いで、お引き受けをしました。

ドレスの再現製作

八重の衣装を期限までに確実に仕上げるために、生活科学部

人間生活学科3年次の科目「応用演習」で、服飾文化ゼミ生12名の賛同を得て共に取り組むことにしました。終盤の追い込み期には、空き時間にも演習室に集まって遅くまで製作し、卒業論文の4年次ゼミ生も加わり、学生15名、研究室助手1名、教員1名、計17名で仕上げました。

八重の衣装は、同志社キャラクター「八重さん」のモデルとされた洋装姿の写真（1888年11月3日撮影）をもとに再現しました。写真の衣装はウエストを細く締めた上着と後ろ腰を大きく膨らませたスカートからなる、当時欧米で流行していた「バスルスタイルのドレス」でした。授業で製作する以上は、できるだけ当時のドレスに忠実に再現するよう心がけました。

4月には、「八重の生涯」と「19世紀後半の西欧のドレス」について、各自調べたことを発表し合い、基礎知識を共有しました。5月には、新島旧邸を訪れ、裏と八重の生活の場を体感しました。下旬には京都服飾文化研究財団の協力を得て、19世紀後半の西欧のバスルスドレスの実物遺品を細部まで調査させて頂きました。この貴重な体験はドレス再現製作の大きな推進

力になりました。

6月には、試行錯誤の末、オリジナルの型紙を作成し、木綿布で試作しました。下旬に待望の布地が届いて本製作に入り、1着目のドレスとバスルスル用下着は2か月を要して完成しました。

川俣シルクの使用

再現ドレスの布地には、福島県名産の「川俣シルク」を用いました。明治期以降、川俣シルクの洋服地は海外に盛んに輸出され、外貨獲得に貢献しました。川俣町は福島原産の北西に位置し、織物工場も被災されましたが、現在では町を挙げて川俣シルクの復興に取り組み、世界一軽いシルクを開発し、海外からも高く評価されています。

用いた布地は、ワインレッドと黒の少し厚みのある「スーパータッチサテン」で、糸を染めてから織る「先染」独特の張りや玉虫のような光沢があり、私たちの技量を超える、気品のある優美なドレスに仕上げてくれました。

ドレスの寄贈と復興支援

今回ドレスを製作したゼミ生の多くは、本学の授業で洋裁の基礎的知識と技術を習得していましたが、決して専門的で高度なものではありませんでした。勿論シルクの時代衣装の再現も全員が初体験でした。しかし新しい技法を学びながら、それぞれの持てる力を精一杯結集して、何とか9月6日の贈呈式に間に合わせる事が出来ました。

福島県知事へのドレス贈呈式は県庁で行われ、本学から学長をはじめ、ゼミ生3名、助手、教員、広報課長の7名が出席しました。大勢のマスコミの方が取材にこられ、式の様子が全国に広く報道されるなど、その反響の大きさに驚きました。

八重のドレスは9月14日～11月4日まで二本松市歴史資料館の「新島八重の生涯と戊辰戦争展」で、コート姿の裏と手をつなぐように展示され、多数の方が見に来て下さいました。その後は会津若松市にある福島県立博物館でガラスケースに入れて展示され、大切に保管されます。福島県の皆様には、学生達が作った八重のドレスの寄贈を本当に喜んでいただき、ドレスをとんでも大事に扱って下さっています。

もう1着のドレスも11月に完成し、女子大学史料室の「新島八重と同志社女学校展」（13年7月31日）で展示中です。

八重のドレスのご縁からも、今後益々福島県と同志社の交流が深まりますよう、そして豊かで美しい東日本の、一日も早い復興を心よりお祈りしております。



八重のドレスを再現した女子大学服飾文化ゼミの学生たち

同志社高等学校 表象文化研究

— Googleでは検索できないことを知る —

中学校・高等学校教諭 中澤 圭／橋本 淳

本校では、高校3年生で総合的な学習の時間が3単位、複数講座設定されている。その中のひとつがこの総合研究で、2012年度のテーマは「表象文化研究」である。

この授業では主として、映画・ポップミュージック・広告・コミック・ファッションなど、マスカルチャーを取り上げた。それらの文化表象の分析を通じて、現代社会、あるいはそこに生きる自分自身を深く考察する、というのが目的である。

ちなみに総合研究担当教員の決定には条件があり、「異なる教科担当者が複数名であつたこと」となっている。さらに公募制である。偶然ではあるが、芸術系の二人、美術科の中澤と音楽科の橋本が手を挙げた。

教科書があるわけではないので、二人で相談して内容を一から作り上げた。実際に行つた教案の、数倍に及ぶアイデアが出されては消えた。例えば映画分析の授業では、当初「コラテラル」という映画を材料にしようと考えていたのだが、話し合いの末、プリント等をすべて破棄して「リブリー」に変更した。もちろん、その方がよりふさわしいと判断したからである。ち

なみに、映画分析はラカンの「鏡像段階論」に基づいて行つた。まず、萩尾望都の傑作漫画である「半神」を、ストーリー展開をもとに徹底的に再構成した。その経験をもとに、「リブリー」を各自が応用分析し、レポートにまとめた。メディアは異なるが、次々と現れる「鏡」や「双子」のメタファーを手掛かりに、両作品の共通点や異なるメッセージを読み解いていった。

また、現代ポップスターのアイコンであるマイケル・ジャクソンを素材に、人種差別や経済格差について考えた。ポップスターとしてのマイケル・ジャクソンは誰でも知っているだろう。しかし、彼のパフォーマンス・ヴィデオを繰り返して、隅々まで観察したことのある人は、どれほどいるだろうか。生徒諸君にはまず、映像に映っているもの、聞こえた音、歌詞などの直接経験を、詳細に分析してもらつた。そして、マイケルがなぜ自らの肉体に異様とも思える改造を施し続けたのか、そしてそれがヴィデオのどの部分から読み取れるか、ということを経路図でデイスカッションしてもらい、発表した。人々は彼に熱狂

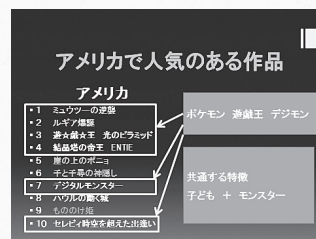
し、やがて貯めた。彼の悲劇的な生き様には、我々の生の条件に触れる普遍的な何かがあるはずだ。

ここで注意しなくてはならないのは、単なる感想の交流・発表では、まったく説得力を欠く、ということである。観察された資料、映像やサウンドに根拠を置きつつ、論理的に自分の考えを構成しないと、せっかく頑張つても「そういう考えもあるな」という程度で終わってしまう。発表はコンクール形式ではなかったが、勝敗は明らかだった。エヴィデンスを適切に提示し、理路整然と意見を述べたチームは説得力に優れていた。

結論に何かがあるのかを知っている人は、教師も含めて誰もいない。自分たちで考え、自分たちで根拠と説得力を創造しなくては、よい評価はもらえない。それにはやはりデータと論理構成がカギになってくるのである。

ほかには、ジェンダー・スタディの入門編として、日本の流行歌の歌詞をもとに「人々が女性に望むイメージ」が、時代によってどのように変化していったか、変遷を考察してレポートにしてみよう。

そのようなワークを経たのち、グループごとにテーマを自由に設定し、Power Pointを使用して研究発表した。サウンド、映像、テキスト等を同一のオペレーションで扱うことのできるPower Pointは、この授業ではたいへん有効であった。たとえばあるグループは、同じ商品のテレビCMでも（ペプシコーラやマクドナルドなど）、日本とアメリカではまったくテイストが違うことに着目し、その背景にある文化的差異、あるいはそれをもたらしている民族構成の違いに着目し、発表した。



発表用Power Pointシートの例
アニメにおける日米子供観の違いを考察した



メディアセンター知創館における、映像編集課題作成の様子

いまだき、何かを知りたい、調べたい、と思ったとき、まずインターネットで検索するのがいちばん手取り早い。高校生にとって「調べること」は、「検索すること」とほぼ同義になりつつあるように思う。しかしネットで検索して出てくるのは、「誰かが知っていること」だけだ。「誰も知らないこと」はエラーになる。たとえば、マイケル・ジャクソンは何と戦つていて、またその戦いに勝利したのか否か、というようなことは、だがその「誰も知らないこと」を調べ、考えることこそ、本当に価値のあることではないだろうか。定められたゴールに向かって走る速さを競っているだけでは、美しい風景に出合うことはできないのである。

同志社 クローズ・アップ

教育内容の充実を図って 同志社女子中学校・高等学校における新カリキュラム

女子中学校・高等学校教諭 中村久美子

はじめに

学力低下が叫ばれている昨今、本校では、いかに学力の充実、維持向上を図っていくかを主眼に、学習指導要領の改訂に伴うカリキュラムの変更を検討してきた。2003年度より、従来からの課程を踏襲し同志社大学・女子大学への推薦進学を基本としたリベラル・アーツコース（LAコース）に加えて、英数理系科目を重点的に学習することにより、同志社大学・女子大学は勿論のこと、同志社にはない医学部・農学部・建築学科などを目指すワイルド・ローヴァーコース（WRコース）を設置している。次表のようにLAコースでは高2までで幅広く必修で学び、確かな基礎学力を定着させたうえで、高3でそれぞれの希望や進路に応じた教科を重点的に学習する選択授業を実施している。

本校の特色

学校行事も盛んな本校では、生徒たちが企画・運営を行い様々な行事を作りあげている。主体的に取り組むことのできる多様な機会を用いて、自ら考え判断して行動する良き伝統がある。以前から、交換留学や語学研修、実験を多く取り入れた実験ノートによる考察力を養う理科の授業、中学での朝学習、英語の二分割授業、進路に応じた少人数授業、数学1泊研修会、セクター対策の授業など特徴的な教育内容を取り入れている。さらに、生徒自らが自身の課題をみつめて勉学に励むきっかけとなるよう、外部模試や検定試験も導入している。また、毎朝の礼拝は勿論のこと、卒業生や各方面で活躍する社会人による進路講演会や異文化理解講座の開催は、将来の進路を考える良い機会となっている。高大連携プログラムにも積極的に取り組み、生徒の意識向上に役立っている。

新カリキュラムの理念

新学習指導要領では、生きる力をはぐくむこと、基礎的・基本的な知識および技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力をはぐくむこと、主体的に学習に取り組む態度を養うことなどが改訂の趣旨として示されている。そのため、基本的には学校週5日制を維持し

ながら、授業時間数確保のために7時間目実施曜日を週1回から3回に増やし、手厚い指導を実践しつつ、2日間の休日を生徒が個々の目的に応じて有効に活用できるように配慮した。さらに、国語科による『新聞リレーノート』の導入は、新学習指導要領で謳われている言語活動の充実の目的に適った取り組みと言える。

新カリキュラムの実際（おもにLAコース）

本年度から、LAコースは月々金で33時間、WRコースは土曜日を含めて38時間の授業時間数を確保し、中学では基礎学力の定着、維持向上を目指して、3年間で国語は1時間、数学は2時間、理科は1時間、英語は4時間の授業時間増とした。

来年度以降の高校LAコースのカリキュラムでは、必修科目のうち国語、数学、理科、英語で授業時間数を多めに確保した。理科は基礎を付した4科目を必修とし基本的な知識を幅広く網羅した上で、基礎を付していない科目で発展的に学ぶことになる。高3（LA）の選択授業において、4単位科目では国語、数学、地歴、公民、英語、理科から3科目を、2単位科目では全教科から2科目を生徒の希望や進路に応じて選択する。

『総合的な学習』については、高3（LA）で2時間の枠を設け、表現探究、作品探究（国語科）、地歴探究（地歴科）、現代社会探究（公民科）、情報探究（数学科）、トレーニング探究（体育科）、生物探究、地学探究（理科）、同志社とキリスト教探究（聖書科）、人生をみつめる（家庭科）から、自由に選択する。各自の目標や興味関心に合う内容を、より深く探究し充分な準備期間を有効に利用して段階的に学んだ上で、大学での学びの準備として卒業研究的な取り組みになることを目指している。

中学（LAコース）カリキュラム

中1	国語④	社会④	数学④	理科④	英語④	体育③	音楽②	美術①	保健①	総合①	HR①
中2	国語④	社会④	数学④	理科④	英語④	体育②	音楽①	美術②	保健①	総合①	HR①
中3	国語④	社会④	数学④	理科④	英語④	体育②	音楽①	美術①	保健①	総合①	HR①

高校（LAコース）カリキュラム

高1 LA	国語総合④	日本史A②	現代社会②	数学I③	数学A②	化学基礎③	コミュニケーション英語I③	英語表現I③	体育②	保健①	家庭基礎②	芸術②	情報の科学②	総合①	HR①
高2 LA	現代文B②	古典B②	世界史A②	地理A②	数学II④	数学B②	物理基礎②	生物基礎②	地学基礎②	コミュニケーション英語II③	英語表現II③	体育②	保健①	選択①	HR①
高3 LA	現代文B③	古典B②	コミュニケーション英語III③	英語表現II②	体育③	選択X④	選択Y④	選択Z④	選択②	選択②	総合②	総合②	総合②	総合②	HR①